

News Release

ポーラ美術館 報道資料

関連イベント

シンポジウム「コレクションと美術館 - 大原美術館、ブリヂストン美術館、ポーラ美術館の現場から」

私立美術館3館が集う

現場はコレクションとどのように向き合ってきたのか、そして今後どのように向き合っていくのか
美術館の現状と今後を語る

ポーラ美術館は開館以来、鈴木常司のコレクションを紹介する取り組みを重ね、2012年に10周年を迎えました。これを機に、同じく個人コレクションを基盤に、長い活動を積み重ねてきた大原美術館とブリヂストン美術館から、現場をよく知る学芸員をお招きし、ポーラ美術館もあわせて各館のコレクションの特色や活用の仕方について語り合います。当日は、美術館で働く学芸員だからこそ語ることのできる、展示やイベントプログラムの実情・裏側や、そうした仕事を通して日々実感するコレクションと美術館の姿など、具体的な報告を通して、活動領域を広げつつある美術館の今後を探ります。



【開催日時】 2013年4月6日(土) 14:00~16:00

【会場】 ポーラ美術館

【プログラム】

- ・開館挨拶・趣旨説明 14:00~14:10
- ・プレゼンテーション 14:10~15:10 (20分×3)
柳沢秀行(大原美術館 学芸課長) 新畑泰秀(ブリヂストン美術館 学芸課長) 岩崎余帆子(ポーラ美術館 学芸課長)
- ・ディスカッション 15:10~16:00

【参加費】 無料(ただし当日入館料が必要)

公募デザインコスチュームキューピーが完成！3月1日から発売開始！

本展第Ⅲ期の開催に合わせ、ポーラ美術館限定コスチュームキューピーの第3弾を、2013年3月1日(金)からポーラ美術館のミュージアムショップで発売開始します。本商品は開館10周年を記念して、2012年にデザインを公募し、一般投票で最も多くの投票数を集めたデザインを商品化したもので、価格は580円(税込)です。

採用されたデザインは、細井えみかさん(東京都)によるもので、ポーラ美術館が収蔵するカンディンスキー《支え無し》をモチーフに制作されました。ご当地コスチュームキューピーは全国に多くありますが、公募デザインによる商品化は美術館初の試みです。



ワシリー・カンディンスキー 《支え無し》
ポーラ美術館蔵



細井えみかさんによるデザイン画



《薫》 1975年(昭和50) 絵本彩色/額装

ポーラ美術館開館10周年記念展

コレクター鈴木常司 美へのまなざし

第Ⅲ期 杉山寧 とポーラ美術館の絵画

2013.3.1 [金] - 7.7 [日]

ポーラ美術館のコレクションは、ポーラ創業家二代目、鈴木常司(1930-2000)が戦後、40数年をかけて収集した作品群です。総数9500点に及ぶこのコレクションは、戦後の個人コレクションとしては質量ともに日本最大級の規模を誇ります。しかし鈴木は、寡黙な人物であったため、コレクションの生成の経緯や美術作品について語った言葉は多くなく、その存在もあまり知られていません。「コレクター鈴木常司 美へのまなざし」展は、コレクションの中でも鈴木の人物像と関りの深い作品群から、12のテーマを設定し、知られざるこのコレクターの人物像を分析し、ご紹介するものです。第Ⅲ期では、鈴木常司が同時代の作家の中でも最も強い関心を寄せ続けたひとり、日本画の巨匠・杉山寧(1909-1993)の作品を中心に紹介します。

コレクター鈴木常司 美へのまなざし 第Ⅲ期 杉山寧とポーラ美術館の絵画

【会期】 2013年3月1日(金)―2013年7月7日(日) 会期中無休

【主催】 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

【会場】 ポーラ美術館 (神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285) Tel : 0460-84-2111 / Fax: 0460-84-3108

【出品点数】 約300点 【開館時間】 午前9時~午後5時 (入館は午後4時30分まで)

【主な出品作家】 杉山寧(《水》、《洗》、《薫》など23点) パブロ・ピカソ(《海辺の母子像》など5点)

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生(土曜日無料)	700円	500円

【報道に関するお問い合わせは】 ポーラ美術館 広報事務局 担当:増田、小椋、三井 Tel 03-3575-9823 / Fax 03-3574-0316

ポーラ美術館 学芸部広報担当: 比良田(ひらた) Tel 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108

「コレクター鈴木常司 美へのまなざし 第Ⅲ期 杉山寧とポーラ美術館の絵画」みどころ

鈴木常司は、ポーラ美術館設立の準備を進めるなかで、杉山寧作品を常設展示する展示室をつくる構想を持っていたほど、杉山寧の作品に強い思い入れを持っていました。本展第Ⅲ期では、杉山寧の作品を中心にコレクションから鈴木常司の人物像に迫ります。

コレクターのまなざし—日本画コレクションと西洋絵画コレクションとの共通点

鈴木の本画コレクションは、西洋絵画の収集よりやや遅れて本格的に始められました。日本画の収集にあたり、その当時の日本画壇の最高峰にいる作家の作品を集めるという方針を持っていましたが、ただ地位の確立した有名画家であるという理由だけで目を向けたではありません。日本画、西洋絵画ともに、コレクションの対象になったのは、因習を打破し、新たな流れを作った先進的な画家たちでした。

日本画のコレクションの中でも中核をなすのが、全43点の杉山寧の作品群です。初期の傑作《水》をはじめ、最後の大作《洗》(コウ)、そして画家の最後の作品ともいわれる《鍬》(キン)の制作を依頼するなど、鈴木は杉山に惚れ込んで総数43点もの作品を購入しました。杉山寧は、「〈絵画〉だけでなく表現できないもの」を求めて試行錯誤を重ねましたが、油彩画を思わせる厚塗りのマティエールなどはその造形上の成果といえます。

鈴木は、西洋絵画を収集する過程で、印象派、それに続くピカソやマティスなど、因習を打破して西洋絵画の流れを変えてきた、数々の革新的な画家の作品に触れていたために、杉山の先進性に着目できたのだといえるでしょう。



《水》1965年(昭和40) 麻布彩色／額装

碧いナイル河の流れを背景に、水汲み用の壺を頭に載せた女性が描かれている。洗練された構図は、画面に凛とした気品すら漂わせる。



《洗》1992年(平成4) 麻布彩色／額装

豊かな色彩感覚が発揮された晩年の大作。1992年の「杉山寧の世界作品と素描」展に出品後も、杉山はアトリエで手を入れ続けた。

鈴木常司と杉山寧コレクション — 同時代を生きる画家の画業を網羅



《相》1961-1962年(昭和36-37) 麻布彩色／額装



《鍬》1993年(平成5) 麻布彩色／額装

50号以下の抽象絵画ばかりの全9点による、1962年の「杉山寧新作展」に出品された《相》(ソウ)を皮切りに、鈴木常司は生涯にわたり全43点の杉山作品を収集しました。晩年にいたるまでの杉山との直接の交流については不明ですが、晩年の大作《洗》(コウ)が出品された1992年の「杉山寧の世界 作品と素描」展の会期終了後に本作品の購入を申し出、また翌年にはいわゆる「赤富士」をモチーフとした《鍬》(キン)を画家に依頼して制作してもらうなど、杉山の晩年、鈴木とのあいだには密接な関係が確立していたことが分かります。なお、《鍬》には「忍野 秋朝」と書かれた画家自身によるメモが添えられています。当時、鈴木との側近であった人物によれば、本作品は山梨県の忍野に泊まりこんで描いてもらったものであるとのこと。

杉山寧—「日本画」の概念を覆した天才画家

東京美術学校在学中に帝展(帝国美術院展覧会)に入選し、さらに美術学校を首席で卒業した杉山は、新進気鋭の若手画家として華々しく画壇にデビューしました。高山辰雄らとともに結成した「瓊爽画社(るそうがしゃ)」を経て、新たな日本画を模索していた杉山は、伝統的な日本画とは異なる、厚塗りによる重厚な画肌の表現を編み出します。彼の実験的な試みとして、下記のようなものが挙げられます。

1. 「純粋絵画」、「造形主義」

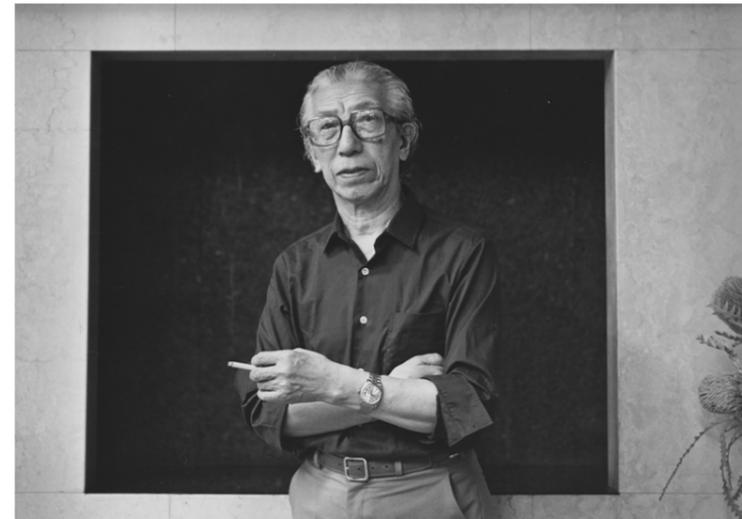
色面構成のように抽象的なモチーフを組み合わせた背景に、細密な花鳥を配した画面の二重構造を推し進めました。情緒的、文学的な要素を極力排した「純粋絵画」を追究し、「絵画だけでなく表現できないもの」を求めた姿勢は、「造形主義」と呼ばれました。

2. 厚塗りのマティエール

「日本画の特質の一つは、その顔料にあるのではないか」と語った杉山は、日本画の顔料を塗り重ね、独特の厚塗りのマティエールによる表現を追究しました。杉山独自の日本画の顔料による厚塗りは、通常日本画に使われる絹本や紙では画面を支えられないため、カンヴァスに描いています。

3. 額装

新しい住宅事情や展示空間に合わせ、掛け軸や屏風といった日本画の伝統的な表装をとらず、額縁に収める展示方法を選びました。杉山は、木製の額よりも、自身の絵画の理知的な構成と堅牢なマティエールに最も合う表装を検討し、ステンレス製の額縁を選びました。



2013年杉山寧展情報

没後20年にあたる2013年、杉山寧の初期から晩年にかけての作品を展覧する回顧展「杉山寧展 — 悠久なる刻を求めて —」が順次開催されます。当館からも12点の作品(展示替あり)を出品します。

- ・3月6日(水)～3月25日(月)……日本橋高島屋
- ・6月15日(土)～7月21日(日)……松坂屋美術館
- ・9月4日(水)～9月16日(月)……京都高島屋
- ・10月16日(水)～10月28日(月)……横浜高島屋



杉山がこだわったステンレスの額で額装された作品 左:《麗》1981年(昭和56) 右:《礎》1983年(昭和58)

洗練された構図—鈴木が一貫してもとめた絵画の嗜好



《奏》1991年(平成3) 麻布彩色／額装



《礎》1983年(昭和58) 麻布彩色／額装



《鳥》1973年(昭和48) 麻布彩色／額装

杉山は、画学生の頃より「純粋絵画」という言葉に惹かれ、それまでの日本画によくみられた情緒的、文学的な要素を取り除くよう努めました。画面における純粋を追究すべく、抽象的なパターンによる絵画空間を作り出し、写実的なモチーフの配置を巧みに計算して、描きこみました。その厳格な構図は、静謐な叙情性と気品をたたえた杉山の絵画を形成する重要な要素です。杉山芸術におけるこのような造形性が、実直であったという鈴木常司の人柄や美意識と呼応していたことは、容易に想像することができます。

鈴木常司 略歴

1930年7月 静岡県に生まれる。1953年8月 経営学を学ぶため、アメリカに留学。マサチューセッツ州のウイリアムズ・カレッジに学ぶ。1954年1月 コロンビア大学入学準備のため、ニューヨークへ移る。同年3月、父、忍の急逝を知り、留学を中断。直ちに帰国し、(株)ポーラ化成工業、(株)ポーラ化粧品本舗の社長に就任。父の遺業となった新工場の建設に尽力。経営のかたわらでポーラ文化研究所をはじめ、ポーラ伝統文化振興財団、ポーラ美術振興財団を設立するなど文化事業も手がけた。1996年 会長に就任。2000年 逝去。

